

# SHIN CLUB 236

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



今月のトーク/monthly talk

「竹本容器株式会社 TOGETHER LAB 北側外観」 撮影：アック東京

## デジタルとリアルの協働

今月ご紹介するのは、9月に東上野に竣工した、スタンダードボトルメーカーの開発拠点となるビルです。

「竹本容器株式会社」様は 1950 年創業、1960 年に東京・浅草の合羽橋道具街にガラス容器の販売店舗を開業されました。1980 年代には販売だけでなく製造にも着手し、日本各地に製造拠点を広げてこられました。1996 年には初の海外拠点となる中国・上海にオフィスを開業し、米国、タイ、オランダ、インドに進出。たゆまぬ技術革新とそれを支える優秀な人材によって、日本を代表するスタンダードボトルメーカーとしての地位を確立しました。

「スタンダードボトル」とは、同社が容器の企画・設計を行い、製造に必要な金型を自社で製作・所有するものです。化粧品やトイレタリー製品メーカー等の顧客企業が、製品差別化のために独自の容器デザインの製造を成形メーカーに依頼する場合、多くのケースでは容器を製造するための金型製作費用は顧客が負担し、成形メーカーが製品設計と生産を請負い、顧客独自の容器を生産後納品することになります。

しかし、金型の製作には一般的に 3 カ月程度の期間と数百万円の費用が必要であり、多くの顧客企業にとっては容器の調達に時間とコストがかかる点が課題となっています。

これに対し、同社はお客様に替わって自社で金型を製作し、お客様が希望する包装容器を生産、納品するため、お客様は自ら金型を製作する場合と比べると短期間でコストを抑えて、希望する包装容器を、必要な時に、必要な量だけ調達することができるのです。

同社が有する金型の種類は 2019 年 6 月末現在で 3,551 点と業界 1・世界最多の豊富さを誇っています。

さらに、長年にわたり様々な本体やキャップに加え、新たな機能を加えた既製品の「スタンダードボトル」に加えて、製品の付加価値を上げるデザインや安全に内容物を包む品質を施した「カスタムボトル」の製造にも着手。3次元 CAD システム、コンピュータグラフィクス、自動倉庫による在庫管理など、新しい技術や生産手法を採用することで、お客様が求める品質や機能、差別化の要素に確実に応えられてきました。

2014 年には東京証券取引所市場第二部に上場を果たし、2017 年に同市場第一部銘柄に指定されました。

そして営業・開発・生産の一貫体制による対応能力を一層強化するために、今回このラボ（実験室）を備えた拠点となる「TOGETHER LAB」が建てられることになりました。お客様との協働を意味する「TOGETHER」として、ハイクオリティ 3D CAD を用いて、アイデアスケッチから製品展示イメージまで、様々なシュミレーション画像を同 LAB においてお客様に提示することができるようにしていくとのことです。製品開発時間の大幅な短縮が期待されます。

そして、環境問題がクローズアップされている現在、EU が使い捨てストローの使用を禁止するなどの動きがあり、使用禁止対象外となる包装容器等のプラスチック製品についても、リデュース・リユース・リサイクル・リニューアブルが求められています。

同社では従来の包装容器の開発基準・価値観が大きく変化する可能性があると考えて、「詰め替え容器」、「薄肉容器」などリデュース・リユースに貢献する製品の開発・提供を行っているほか、「単一素材を利用した容器」や「バイオプラスチックを利用した容器」など、リサイクルやリニューアブルに貢献する製品の開発、提供にも取り組んでいっしょにやります。



東側外観。格子状のコンクリートによって排煙の法規解決を図ることで、開放的な外観をつくっている



西側外観。薄く茶色をいれた外壁に各階ごとにグレーの帯を設けることで変化をつける

所在地：台東区  
 構造：RC造  
 規模：地上6階  
 用途：事務所+作業所  
 設計・監理：秋田忠俊／秋田建築設計室  
 + 秋田亮平／秋田亮平建築設計事務所  
 + 村田加奈子  
 構造設計：鈴木芳典／TECTONICA  
 + 大谷俊夫・廣瀬貴之／秋桜構造計画  
 設備設計：テーテンス事務所  
 施工担当：細谷  
 竣工：2019年9月  
 撮影：アック東京

## スタンダードボトルメーカーの開発拠点となるラボ付オフィス

独自のビジネスモデルで事業展開を進めるスタンダードボトルメーカーのオフィス計画である。台東区は都心の商業地域とは言え、住宅やマンション、商業ビルの他、寺社等伝統的な建物が混在する地域で、近隣住宅との視線・セキュリティ、建物が持つ圧迫感の軽減など、周辺環境への配慮が欠かせない。その上で建物用途の性格にマッチした建築の在り方を考えた。

開発拠点となるラボ付きビルということで、素材感がありつつも建物自体主張しすぎない佇まいがイメージされた。

また、建て主が容器メーカーということで、金型を作ってその中に中身を流してカタチを作るという工程が似ているRC打放しがふさわしいと考えた。

西側に広がる寺社と庫裡に対しては極力開口部を設けないようにし、各階に帯状にふかしを設けることで面を分割し、表情を出している。無機質な打ち放しのコンクリート面は圧迫感が強すぎると考え、塗装でうっすらと茶色を入れることで、トーンを調整した。

一方、東側正面のファサードは建築基準法上必要な付室の排煙窓があるため、各開口からの隔離などの規制があったが、50cm以上の袖壁と庇からなる格子により解決、建物の外観も決定づけることになった。

北側は向かい側がマンションのバルコニーでやはり開口を閉じざるを得なかったが、敷地形状に合わせて、矩形から斜めに張り出した部分の両サイドの開口部から光と景色を取り込んでいる。

斜めに張り出した壁面は、目地棒をならべた型枠を用いることで表情を生み出している。

各階の構成は、1階が作業所、2階はショールームとミーティングルームで、カウンターを設置してお客様に容器の機能を確認いただけるようにしている。3階が実験室とミーティングルームで、4、5階は通常のオフィス、6階は多目的ルームとなっている。6階はオフィスのリビングのようなイメージとし、2階のギャラリーのようなショールームとは、フローリングの種類を変えている。社員が昼休みに食事や談笑に使用できるスペースとしても活用される。バルコニーも設けているが、隣接する施設が見えないように、花壇を設けることで乗り出せないようにしている。

商業ビルは、流行を反映して類型的なデザインになりがちだが、普遍性のあるものにするために、周辺環境をよく読みこみ、機能を満たしたしっかりとしたものを作るべきだと考えている。

(秋田忠俊氏・秋田亮平氏談)



1階エントランス。階高は3.3m



エントランスの壁は、歩道の赤レンガと呼应するようにレッドサンドストーンで変化つけた



2階への吹き抜けの壁に貼られたレッドサンドストーン



2階のショールームとミーティングルーム(右)。左のカウンターで、ボトルの機能を確認できる



3階実験室



6階多目的ルーム。社員のくつろぎのスペースとしても利用される。奥にバルコニー

# Tadatoshi & Ryohei Akita



蔵前の事務所にて 撮影：アック東京

今月は、「竹本容器株式会社 TOGETHER LAB」の設計を担当された、秋田建築設計室の秋田忠俊氏と独立された息子様の秋田亮平氏にご登壇いただきました。

—秋田様は地元の台東区でお仕事を続けられてきたとのことですが、今回の計画もそのようなご縁からでしょうか。

忠俊：竹本容器さんの前社長が私の小学校の同級生で、千葉で木造の別荘を設計させていただいた経緯もあり、10年ほど前から2度ほど企画設計させていただく機会がありました。しかし、私の発想もだいたい類型化し保守的になってきたこともあり、息子の力を借りるいい機会かと思いました。竹本さんの社長も娘さんに交代されていますね。

—建て主様から建物についての具体的なコンセプトの提示などございましたか。

亮平：開発を行う部署が入るといった条件やラボ機能についてのお話がありましたが、その中でデザインは自由にやらせていただきました。ご要望もありましたが、この建物はRC造がいいと感じて、施工会社としてRC造の得意な会社の中から、「YON-KAビル」を担当された構造事務所の方に紹介してもらい辰さんにお願ひしました。

忠俊：打ち放しのときには、いつも施工者をどこにするか悩みますが、辰さん、難しいのが好きだと聞いたので。実際、以前協力させていただいたDIK設計室での仕事の時にも、打ち放しでは悩みましたから。

—DIK設計室は藝大を退官された片山先生の事務所ということですが。

忠俊：私自身は法政で勉強しましたが、日本は工学系に建築が偏り過ぎているように思います。バックアップは構造の先生の方でしてくれるので、むしろ、素材に対する感性とか文化・歴史に対する理解、興味など、美術、文系にわたる総合力が必要とされますので、息子には工学系ではない藝大を勧めたんです。学校も近いでしょう。

—上野ですね。近くても簡単には入れませんが。

亮平：入るのには、大分苦労しました。

中学までは地元ですずっと来ていますし、この事務所は小学校の友人のもつ倉庫を間借りさせてもらっています。

大学で師事した金田充弘先生は構造計画の先生ですが、藝大の構造ということで、素材やデジタルテクノロジーを切り口に、制作を通して研究を行っています。僕が学生の頃から取り組んでいるのが、「熱可塑性不織布」です。布が熱で収縮するエネルギーを利用し、平面から立体への展開を考えています。

最初はこういう円や基本の形のもの（写真下左参照）、70度以上のお湯をかけると収縮しながら立ち上がります（写真下右）。かたちの原理はシャボン玉の膜と一緒です。究極的には、インスタント・アーキテクチャーのようなものを作りたいと考えています。

—なんか、SF映画みたいですわ。

亮平：はじめは布を縫って、木のフレームにホッチキスで止めるシンプルなものからスタートしていましたが、だんだん、アクリルを使ったり、3Dプリンターでやりだしたりして、パターンや断面を設計するようになりました。大学でこのような研究をしながら、建築の設計を行うという生活ですが、近々きちんと発表したいと考えています。

忠俊：ついていけない。でも建築というのは、日常生活の延長ですから、私はずっと住宅をやりたいのも結局はそこです。誰でも住宅は必要、でもこうでなくてはならないということはない。「自由」であるべきなんです。そうは言っても、私はその土地に、その環境にあったものが好ましいと思います。

千葉の別荘を作るときに、その土地の風土に根付いた材を使いたい、と地元の杉について関係者に尋ねたら、もう山が荒れてしまって無理なんですよ、という話でした。南房総では伝統的に赤瓦があったらしいのですが、それももうないそうです。先日の台風19号の被害も、山の手入れができていないことが大きい要因だと言われています。

ここにきて、過去との大きな断層が出来ていることが現在の状況に影響していると感じています。川の名前を見てもわかりますよね、鬼怒川、荒川…。先人たちの教えを謙虚に受け取らなくては。土地をどう読むか、作ることはできないのですから、ソフトをもう少し考えなくてはならないですね。

—本日はありがとうございました。

秋田 忠俊 (あきた ただとし)  
1950年 東京都台東区生まれ  
1978年 法政大学工学部建築学科卒業  
(株)コア都市設計事務所勤務  
1983年 秋田建築設計室 開設  
1993年 DIK設計室と協働 開始  
2011年 DIK設計室との協働 終了

秋田 亮平 (あきた りょうへい)  
1982年 東京都台東区生まれ  
2010年 東京藝術大学大学院美術研究科 修了  
S.O.Y. 建築環境研究所 勤務  
2016年 秋田亮平建築設計事務所 開設  
2017年 東京藝術大学 教育研究助手



写真左：最初は花びらが開いたような平面の形をしている不織布



写真右：熱湯をかけると不織布が収縮して、美しい蓮の花のように周囲が立ち上がる。この理論を応用して、建築に活かせないか、というのが亮平氏の研究。大学院修了時の制作からスタートし、2017年に教育研究助手として金田研究室に戻り、3年前に研究費を受領、研究を継続している

「竹本容器株式会社 TOGETHER LAB」 竣工式が行われました 9月20日

さる9月20日、「竹本容器株式会社 TOGETHER LAB」の竣工式が開催されました。当日は、設計者の皆様ほか、工事関係者が招待され、弊社からは岩本社長、讃井建築部部長、石井開発営業部部長、佐々木チームリーダー、竹原所長、細谷主任が出席させていただきました。建て主様より、工事の労をねぎらっていただくとともに、建物の今後の安全繁栄を祈願しました。設備などの設置等を経て、事務所の稼働は来年となるとのことですが、一同無事お引渡しができたこと、改めて感謝申し上げます。



挨拶に立つ設計者の秋田忠俊氏



同じく弊社岩本社長

「円錐会企画 ongoing 05」に協賛しました 10月27日 於：SHIBAURA HOUSE

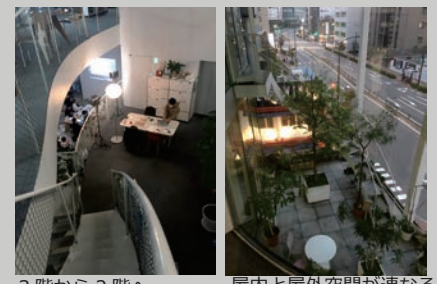
横浜国立大学建築学科意匠系 OB 会円錐会が主催する建築イベント「ongoing」に今年も協賛いたしました。今回は、「那須塩原市まちなか交流センターくるる」と「須賀川市民交流センター tette」という2つの市民のためのプロジェクトが選ばれ

ています。2組の設計者のプレゼンテーションの後、建築家の方々の作品に対するトークが繰り広げられました。「くるる」は大きな屋根を設けた平面計画が市民の自発的な活動を促します。

「tette」は組織設計事務所と若手建築家の協働という条件の下、5年半にわたる大きなプロジェクトで、メガストラクチャーと呼ばれる大きな床を基本に、子育て支援、図書館、生涯学習の3本柱のプログラムを互いにつなぐものでした。建築家が互いに批評することで生まれる建築文化の熟成を意図されている企画とのことで、会場の「SHIBAURA HOUSE」も、妹島和世氏設計の屋外空間と屋内空間の自由自在な結びつきで新たな交流を生む、これも市民のための複合施設でした。



会場1階ホール。プレゼン後は懇親会会場に



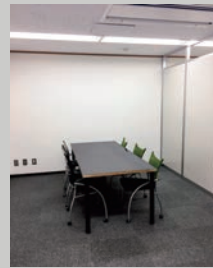
3階から2階へ

屋内と屋外空間が連なる



「本社7階に新たにオフィススペースを確保しました」 10月1日～

弊社は、お蔭様で、この10月に創立20周年を迎えることが出来ました。これまで渋谷のビルのワンフロアで本社全体の業務を行ってまいりましたが、ここ数年保管書類も増え、少し手狭になってきたこともあり、このたび同ビルの7階に新たにオフィススペースを確保することにいたしました。こちらは主にリニューアル・リノベーション部門の拠点となり、また会議・打合わせのスペースも確保し、近場の現場事務所としても使用いたします。日々の業務に追われがちな社員たちのキャビネットも少し分散され、整理整頓しやすく効率的な仕事につながっていくことでしょう。



写真左上：応接コーナー  
写真左下：再生部コーナー  
写真上：打ち合わせスペース



写真上：さっそく11月の全体会議で利用。カスタマー室による事例報告会が行われていました

第9回「ZEN社一丸大運動会」雨天のため中止となりました 2019年10月22日

前月号で「参加者募集」と告知させていただきました、「ZEN社一丸大運動会」は雨天のため中止となりました。たくさんの方の参加希望をいただきましたが、申し訳ございませんでした。今年の秋は台風が多く訪れ、各地に大変な被害を与えました。来年は天候に恵まれますように。



編集後記

・9月、10月とたて続けに日本列島を襲った台風。多摩川の氾濫には驚かされました。ハザードマップを確認して、改めて自分の住む地域の防災に努めたいものです。

(株)辰通信 Vol.236 発行日2019年11月10日  
編集人：松村典子 発行人：岩本健寿  
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS 渋谷ビル5F TEL:03-3486-1570  
FAX:03-3486-1450 E-mail: daihyo@esna.co.jp URL:http://www.esna.co.jp



「SHIN CLUB」はWEB上でもご覧いただけます。バックナンバーもPDFで掲載しています。スマホはこちらから→

